CONTENTS

02 SPECIAL ARTICLE
What is SILC ?
崇城大学「英語教育 “超” 進化プロジェクト」レポート
07 SERIES
九州・沖縄8県人の発見
09 A LABORATORY REVIEW
生物生命学部 応用生命科学科 医用生体工学講座 上岡研究室
工学部 機械工学科 東町研究室
11 NEWS
衝撃先端技術研究センター研究報告会
塩谷教授が生物工学会で生物工学賞を受賞
「looking for NEW EARTH」展を開催
薬学部がリメディアル教育への「e-learning」を導入
英国王立化学会が専門誌で新海教授を特集
12 TOPICS
パイロットコース生が飛行訓練や航空大学校見学を実施
学生フォーミュラチーム「*Sojo Project F*」が試走
第3回「SOJOビエンナーレ2009」表彰式
高難度な技能検定や資格試験に数多くの学生が合格
13 SOJO as it is
秋元研究室がサテライト研究室活動を現在進行形で展開
14 THE HISTORY OF PROFESSOR
芸術学部 デザイン学科 船津邦夫 教授
15 ALUMNI
ニチバン株式会社 梶原崇弘さん
株式会社メトラン 江藤洋幸さん
16 INTERNATIONAL EXCHANGES
国際交流だより
CLUBS' ACTIVITY
剣道部／生物研究同好会
17 THIS IS MY FAVORITE BOOK
心響の一冊
18 LOCAL AREA COOPERATION
地域連携
SOJO COLLEGE INFORMATION
崇城大学専門学校からのお知らせ

■表紙アートは、大学院修士課程・美術専攻（日本画）を2009年3月に修了した川口恵（かわぐちめぐみ）さん（熊本県・熊本北高校出身）の作品「ひつじ唄Ⅱ」。熊本動植物園で出会った一頭の羊（サフォーク種）をモチーフに、その質感を“視覚的”に表現した150号の意欲作。「思わずさわってみたくなる」絵をめざし、画材を重ねて盛り上げる技法にチャレンジ。この作品を発表した大学院研究科修了制作展では実際、さわってみた人もおられたよう。また学部生の頃から一貫して動物をモチーフに取り組む川口さんは現在、1年間の期限つきながら、作家としての創作に没頭中。「その後も10年、いや20年は動物をテーマに描き続けていきたいと思っています」と語ってくれました。

SOJO 2010年度 入学試験情報

自己推薦試験

後期	実施学部	■工学部※1 ■芸術学部※2 ■情報学部 ■生物生命学部
	願書受付期間	02月08日［月］～02月22日［月］
	試験日	03月02日［火］
	合格発表	03月05日［金］

一般試験

前期 ※3	実施学部	■全学部※1
	願書受付期間	01月08日［金］～01月25日［月］
	試験日	01月30日［土］・01月31日［日］（試験日選択型）
	合格発表	02月10日［水］※薬学部は02月12日［金］
後期	実施学部	■全学部※1
	願書受付期間	02月15日［月］～03月10日［水］
	試験日	03月14日［日］
	合格発表	03月19日［金］

大学入試センター試験利用試験

前期	実施学部	■全学部※1
	願書受付期間	01月08日［金］～02月01日［月］
	試験日	本学独自の試験は課さない
	合格発表	02月10日［水］※薬学部は02月12日［金］
中期	実施学部	■全学部※1（薬学部は中期日程に後期として実施）
	願書受付期間	02月15日［月］～03月11日［木］
	試験日	本学独自の試験は課さない
	合格発表	03月19日［金］
後期	実施学部	■全学部※1（薬学部は中期日程に後期を実施）
	願書受付期間	03月15日［月］～03月23日［火］
	試験日	本学独自の試験は課さない
	合格発表	03月27日［土］

※1 宇宙航空システム工学科は総合課程のみ　※2 芸術学部は自己推薦試験
※3 工学部（※1）・情報学部・生物生命学部・薬学部は特待生選考を兼ねています

＜工学部 宇宙航空システム工学科 専修課程＞

一般・専願試験

前期	実施コース	航空整備士養成コース（専願試験）、パイロット養成コース（一般試験）
	願書受付期間	01月08日［金］～01月25日［月］
	試験日	01月30日［土］
	合格発表	02月10日［水］
後期	実施コース	航空整備士養成コース（専願試験）、パイロット養成コース（一般試験）
	願書受付期間	02月15日［月］～03月10日［水］
	試験日	03月14日［日］
	合格発表	03月19日［金］

What is SILC?

崇城大学「英語教育 “超” 進化プロジェクト」レポート

2010年4月、崇城大学は英語教育のさらなる充実をめざし、
その拠点かつ推進機構となる「SILC*」を開設する。
*Sojo International Learning Center
同時に、日本における英語教育のリーダー校のひとつであり、
独自の指導メソッドと実績をもつ神田外語大学（東京）と連携。
同大が実践をふまえて選考した
ネイティブスピーカー10名が専任講師として赴任してくる。
では今なぜ、理工・芸術・薬学系の崇城大学が、そのような取り組みを行い、
英語教育を “超” 進化させようとするのか――。
グローバル化が進み続ける社会を見つめた、
このプロジェクトの意図に迫ってみよう。

※各プラン（計画図面）は2009年10月時点であり、完成時との異なりについては予めご了承ください。

Project Leader MESSAGE

事務局長 渡邉 和親

皆の前で英語を話す双方向型授業は日本語でのコミュニケーション能力さえ飛躍的に伸ばしてくれる

今回の改革を、岳風の編集スタッフが「英語教育“超”進化プロジェクト」とネーミングしてくれましたが、管轄主幹である私自身も「大学の狙いをうまくあらわしてくれたな」と思っています。但し大学には、学生たちに確かな英語運用能力を身につけてもらうことに並ぶ、深い意図もあるのです。それは「少人数制の双方向型授業により、皆の前で英語を話すことを通じて、コミュニケーション能力の重要性を再認識させること」に他なりません。だから来春から本学で学ぶ新1年次生に、たとえ「英語が苦手だから理系あるいは芸術系の学部に進んだのに」という人がいても、皆の前で英語を話し、伝えようとすることに頑張ってほしいのです。その結果、英語力はもとより、日本語でのコミュニケーション能力が飛躍的に向上するはず。各学部・学科の専門教育に、このような“プラス・アルファ”を狙う崇城大学へ、大きな期待をお寄せください。

SILC April, 2010 Open!!

学生会館が「SILC*」となる春、崇城大生の多くが英語を話し始める。

*Sojo International Learning Center

2009年7月、新・英語教育の導入および「SILC」の2010年4月の開設に向けて、本学と神田外語大学（東京）の協力協定に関する締結式が行われた。
その内容をもとに、本誌が「英語教育“超”進化プロジェクト」と呼ぶ今回の取り組みは、本学が進めてきた教育改革の一環であり、2010年度入学の新1年次生の英語授業を主に展開される。また新カリキュラムにより、コミュニケーション重視の授業を行うのは、協力協定を結んだ神田外語大学（東京）が本学での実践をふまえ選考した10名のネイティブスピーカーであり、英語教育の専門家でもある彼ら常勤講師陣の実力の高さも確認されている。
しかしプロジェクトの目的は「国際舞台での活躍やグローバル化が進む社会への対応を視野に入れた、英語が話せるエンジニアや薬剤師、芸術家やクリエーターの育成」にあり、新1年生を対象とした英語授業に限らず、ネイティブスピーカー講師たちは全学生との交流を図る。そして、その主な場となるのが、学生会館を改装した「SILC」である（イメージCG参照）。
この「SILC」には、神田外語大学の英語教育メソッドに則した“シカケ”が随所に施されてあり、ネイティブスピーカー講師とはもちろん、学生相互も気後れなく英語で会話する環境づくりがめざされている。
また「SILC」のディレクターを務めるジョナサン・ローベリー氏からも「私たちの交流やコミュニケーションを楽しむことで英語を身につけていきましょう。皆さんとの出会いを待望しています」とのメッセージが届いている。
なお2010年度以降もネイティブスピーカー講師は増員される予定であり、理工・芸術・薬学系の本学ながら、キャンパスの国際性は増し続けることだろう。
専門の学びが進むほどに、研究や創作が深まるほどに、「英語力の必要性」を感じている学生たちにとって、この「SILC」をサロンとするメリットは多大。まずは英語でのコミュニケーションに慣れて親しみ、世界へ雄飛してほしいものである。

SILC Director and Assistant Director PROFILE

Director
Jonathan ROWBERRY
（ジョナサン・ローベリー）
イギリス（ロンドン）出身。ロンドン大学教育学部にて「英語を母語としない者への英語教授法」を専攻、「MA in TESOL」を取得。神田外語大学での教育実践を経て、現在は英国で教壇に立つ。

Assistant Director
Christopher STILLWELL
（クリストファー・スティルウエル）
アメリカ（ニューヨーク）出身。コロンビア大学で英語教授法を学び「MA TESOL GPA 4.0」を取得。神田外語大学に4年間在職。

Assistant Director
Scott CROWE
（スコット・クロウ）
オーストラリア出身。南クイーンズランド大学で応用言語学を専攻し「MA Applied Linguistics」を取得。神田外語大学に4年間在職。

I want to be able to speak English !!

英語が話せるエンジニアや薬剤師へ、芸術家やクリエーターへ。

円卓中央にあるのは、中村末廣副学長が「なにかを気づくきっかけになれば」と持参された英国赴任時の写真の数々。驚くことに、そこにはエリザベス女王やチャールズ殿下と談笑する中村末廣副学長の姿が。

Suehiro NAKAMURA

●中村 末廣／崇城大学 副学長／1959年にソニー入社。英国「SONY UK limited」の収益力を大幅に高めることに成功し、テレビ事業本部長から執行役副社長まで歴任。2002年にソニー中村研究所を設立。2007年1月より本学副学長。就任以来、情報学部・情報学科の改編をはじめ、本学の教育改革にリーダーシップを発揮してきた。

Sayuri NAKATA

●中田小百合／大学院博士後期課程　応用生命科学専攻2年次生／熊本県・熊本高校出身／高校時代は自称「勉強が苦手だった」が、本学での学びや研究にふれ、その楽しさや充実感から「気づけば大学院博士後期課程まで進んでいました」とのこと。現在は上岡龍一教授のもと“細胞膜のゆらぎ”によるガン治療薬の研究・開発に参画中。

Hiroaki FUKUSHIMA

●福嶋寛明／大学院修士課程　電気・電子工学専攻1年次生／福岡県・東福岡高校出身／学部ではソフトウエアを主に学究。その発展を求めて大学院に進み、現在は音の反射・反響を視覚シュミレーションするソフトウエアの制作を行う。今年度9月には約10日間、ヴェトナム国立大学との騒音対策共同研究のため現地入りしている（本誌16P参照）。

Namiko KOBAYAKAWA

●小早川菜美子／薬学部　薬学科3年次生／熊本県・真和高校出身／医師や看護師たちと連携、チーム医療の一員として活躍する臨床薬剤師になるのが目標。欧米で開発された新薬の情報収集、外国人への服薬指導などを意識し「確かな英語運用能力を身につけておきたい」という。ドイツへの派遣時に親しくなった各国学生たちとの交流は今も続いている。

Yui TAKANO

●髙野結衣／芸術学部　美術学科（芸術文化コース）3年次生／熊本県・必由館高校出身／教会のワークキャンプによりインドを訪ね、現地でふれたインド文化の奥深さに興味を持った。中村末廣副学長へ「英語圏の留学先・協定先を増やしてほしい」とアピールした。

Chiharu HIGUMA

●日熊千春／工学部　ナノサイエンス学科2年次生／福岡県・直方高校出身／医薬品や化粧品などにナノサイエンスを応用する研究者になることが現在の目標。しかし知的好奇心の幅はかなり広く、「将来の夢が広がり過ぎて困っています」とのこと。また今回の談論により「海外留学や外資系企業への就職が視野に入ってきました」とも述べる。

●先のページでの「SILC」の紹介にもあるように、グローバル化が進み続ける社会において、本学が育成する理工系の研究者やエンジニア、ITエキスパートや薬剤師、アーティストやクリエーターにも“英語というスキル”が不可欠なのは明らかながら、ではその必要性を学生たちはどれほど感じているのか。プロジェクトの発表から約4カ月を経た晩秋、元ソニーの副社長である中村末廣副学長を座長とする円卓へ、5学部5名の学生が集まってくれた。その冒頭、中村末廣副学長は約10年にわたった「SONY UK（英国）Limited」での国際ビジネスや英国生活の経験をふまえ、学生たちの発言を次のようにして促した。

中村　ソニーはどれほど巨大企業になっても“技術屋集団”であることを自認してきた。その一方、新たな技術を開発し、それをより多くの人々の暮らしに役立てるには、世界中から情報を受信すると同時に発信しなければならず、英語を日本語と同等の“社内共通語”にする必要があった。だから会議に日本語を母語としない者が一人でもいる場合、全員が英語で議論した。また創業者の一人である盛田さんも英語でのスピーチを世界中で行い、各国の人々から「その簡潔かつ丁寧な英語は熱意が伝わるものだった」との評価を得ていた。そして今、これらを「ソニーだから……」などと捉えず、自身も同じ環境にあると思ってほしいがどうだろう。

●ソニーというグローバル企業での英語運用の実際にふれ、以前に参加した国際学会でのことを想起した中田小百合さん（大学院博士後期課程2年次生）が、まずは発言することに。

中田　専門はバイオベースのガン治療に関する研究。海外の資料や文献を読むことはもちろん、試薬や実験器具には欧米製も多く、その取寄せや仕様書を通じて、学部4年次の頃から英語は必要不可欠な状況でした。しかし東京で行われた学会で発表した際、ある参加者から英語で質問されて困窮。科学に“国境がない”ことを痛感した私はもちろん、本学に導入される“新・英語教育”や“SILC”の開設は、研究者をめざす者にとっても朗報だと思います。

●この発言が呼び水となったのだろう。情報学系の研究に取り組む福嶋寛明さん（大学院修士課程1年次生）が発言をつなげる。

福嶋　日進月歩のIT領域において、新たな技術が日本語で解説されるまで待っていたら、それは新技術でなくなってしまう。また米国の書籍や資料も英文版なら発行直後に入手できます。世界中と瞬時に情報交換するインターネットの存在を前提とした技術開発を行う者にとって、“英語ができない”は致命的なこと。それについては入学前から意識しており、学部3年次の9月には、本学が実施した英国語学研修に参加しました。

●学生たちの国際志向は中村末廣副学長が思っていた以上に高いようであり、次いで発言した薬学部3年次生の小早川菜美子さんもその一人。彼女は2年次の夏、ドイツで行われた「ISH*2008」へ派遣されている（写真はその際の小早川さん／前列中央）。

*International Summer Science School of Heidelberg

小早川　入学早々、熊本市が渡航費の一部を負担してくれる「ISH」のことを知って一念発起。これからの薬剤師に英語力が求められることも強く意識しながら英会話学習に取り組み、学内や熊本市の選考などを経て、派遣学生に選ばれました。ドイツ・ハイデルベルグ市では世界の各地から選ばれた学生たちと共に約1カ月間、自然科学系の講義・演習に勤しみました。その共通語はもちろん英語。私と同様、学生たちは英語を母語としないにも関わらず皆が流暢。来春、本学に開設される「SILC」へも足繁く通い、ネイティブスピーカーの先生たちとの会話・交流から、英語力をさらに高めていきたいと思っています。

●そんな小早川さんは1年次、福嶋さんが先に述べた英国語学研修に赴いており、次に発言した芸術学部・美術学科3年次生の髙野結衣さんも同プログラムの参加学生。

髙野　以前から国際的な活動に関心があり、私も1年次に約2週間、ロンドン郊外にホームステイしながら語学学校で英語の勉強をしました。また、その翌年には熊本市の教会が募ったインドでのワークキャンプに参加。その時のインパクトが強く、3年次に洋画から芸術文化へ転コースし、インド美術を勉強中です。英語の文献を読む機会も少なくありません。

●また彼女は2009年9月、芸術学部生たちが、スマトラ沖地震の津波被災孤児たちをアートで元気づけようと考え企画した「heART giving project」にも参画。スリランカで約10日間の活動をしてきた（写真はその際の高野さん）。

髙野　子どもたちとのふれあい、現地の方々との会話に英語が有効でした。それまで「人と人、心と心で通じあうさ」と言っていた芸術学部の仲間たちでしたが、英語が話せることによるコミュニケーションの広がりを知ったみたい。私たちの間でも「SILC」への期待が高まっています。

●このような先輩たちから、大いに刺激を受けたのが工学部・ナノサイエンス学科2年次生の日熊千春さん。その意見は、多数の学生の共通認識と思われる。

日熊　中高と英語が苦手なこともあり、理系に進学したんです。でも先輩たちが言われるように、勉強が進むほど資料文献や実験器具の取扱説明書を読むのに英語力が必須になってきました。またナノサイエンスの分野は、世界を相手とした開発競争が激しく、英語での情報収集ができなければ遅れをとります。同級生たちとも「今後は英語“を”学ぶだけでなく、英語“で”学べるようになりたいね」と話しています。英語教育の専門家である10名のネイティブスピーカーの先生方が赴任されてくる4月が、とても待ち遠しく感じます。

●これを機に「交換留学や海外交流協定大学との単位互換などの制度を充実させてほしい」といった意見も出るなど、ここから各自の発言が続々となっていったこの日。英語を“仕事語”としてきた中村末廣副学長による次の総括に、このプロジェクトの真価が込められていると思われる。

中村　プロジェクトについて「理工・芸術・薬学系の崇城大学に、英語教育をそこまで充実させる必要があるのか」という声があるのも事実だろう。しかし私は、今日の皆の意見に全学生の声が集約されていると感じる。実際、社会のグローバル化は学生たちのほうが強烈に意識しているようであり、それを真摯に受けとめた中山学長の英断に私はエールをおくる。また協力協定を結んだ神田外語大の英語教育メソッドは素晴らしい。授業に限らず、すべての学生たちに大きな成果をもたらしてくれることだろう。そして、それらが本学の人材育成指針に加わったことを私は誇る。英語が話せるエンジニアや薬剤師として、芸術家やクリエーターとして、皆が国際舞台で活躍してくれる日に向って――。